

旧満洲黒川開拓団内における戦時性暴力（性接待強要）の力学

安元隆子^{*1}

The dynamics of wartime sexual violence (forced sexual services) of the former Manchurian Kurokawa Village Pioneer Team

Takako YASUMOTO^{*1}

After the defeat, the Kurokawa Village Pioneer Team, who had settled in Toraisyo, was attacked by the Chinese and considered group suicide. However, they decided to return to Japan and asked Soviet soldiers to escort them. Then Soviet soldiers asked for women to provide sexual services. After suffering, the pioneer team executives ordered 15 single women to perform sexual services. They thought it was for the pioneers and this led to tears. Why did such coercion of sexual services occur? This paper looked into the mechanism of this decision from what I consider to be three important points.

1. The influence of the foreigner's words on the decision about the blockage situation, 2. How to select the unfortunate young women, 3. Teaching at the girls' school. As a result, the homosocial relationship between the battlefield and the men who remained in the pioneer team became clear. When providing such sexual services, women were distinguished and placed into three separate groups consisting of married, unmarried, and sex industry workers. And when engaging in sexual services, the power of parents and their position within the pioneer team had an effect. In addition, the background to the women's acceptance of such services was the teaching of a women's educational institution called JYOJUKU.

【はじめに】

第二次世界大戦末期に満洲に渡った旧岐阜県加茂郡黒川村¹開拓団（以後、黒川開拓団）は、終戦の混乱の中で集団自決ではなく生きて帰国することを決意した。そのために、黒川開拓団はソ連兵に警護を依頼することとなった。しかし、警護の代わりに女性の提供を求められ、開拓団は開拓団内の若い女性を性接待に差し出す道を選んだ。この事実は長く伏せられてきたが、性接待を強要された女性たちの証言から公となった²。現在で

は、戦時下の性暴力の実態を知らせ、二度とこのようなことが繰り返されないよう記憶し、語り継ぐべき歴史として、黒川分村遺族会によりこの事実を記した碑が建立された³。メディアもこの事実を取り上げている⁴。また、この黒川開拓団の性接待に関する先行研究としては、猪股祐介、山本めゆの論がある⁵。

論者はこの黒川開拓団の性接待強要の事実を知った際、同じ日本人の、それも開拓団という苦労を共にする同志の集まりの中でこのような性接待強要が決定されたことに驚愕した。なぜこのよ

* 1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of International Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

うな事態に陥ったのか、また、このような決断をさせたものは何だったのかを明らかにしたいと考えた。そこで、本論は論者が2021年10月8日に岐阜県ひるが野の佐藤ハルエさん宅にて行った聞き取りを主に、NHKの川恵美が関係諸氏に行った聞き取りをまとめた『告白』と、『岐阜新聞』に掲載された「封印された記憶」(2018年4月24日から11月19日まで連載)の証言を基に、この黒川開拓団が戦時性暴力(性接待強要)に至る過程にどのような力学が働いていたのかを検証し、極限状況下における日本人の意思決定の在り方を考察するものである。

【1】黒川開拓団の性接待強要の経緯

資源と国土が乏しい日本は「王道楽土」と「五国協和」の理念を掲げて満洲国を建国、大陸侵略をもくろみ、その一環として昭和11年8月、「満州農業移民百万戸移住計画」を決定した。その背景には、世界恐慌の影響を受け日本社会が不況のどん底にあり、特に村落共同体の疲弊が大きな問題となっていたという事実がある。同時に、「満蒙は日本の生命線」であり、開拓団に対ソ戦を想定した軍事的防衛の役割も担わせる意図もあった。

まず、試験的な移民が行われたが、軍事と農業という二つの目的が噛み合わず、また伝染病の発生など衛生面での問題もあり、試験移民は迷走した。そこで「百万戸移住計画」が始まり、導入されたのが長野県の大日向村を代表とする分村移民方式であった。ここに大量移民送出のシステムが創り出された。その分村の一つが岐阜県の黒川村であった。

黒川村は吉林省の鉄道京浜線の陶頼昭駅付近に入植した。10の集落より成り、約660人が開拓にあたった。しかし、農業移民の現実には真の開拓ではなく、中国の現地住民の土地や家屋を強制的に安く買い上げたことから、現地住民にとって開拓団民は侵略者以外の何者でもなかったことは周知の事実であろう。これは黒川村だけではなく、大部分の満蒙開拓団に当てはまることであった。

そして、戦況が極めて悪化した昭和20年になると開拓団の男たちも根こそぎ動員され、更に8

月9日には日ソ中立条約を破ってソ連軍が侵攻し、8月15日、遂に日本は敗戦を迎える。すると、満洲国の関東軍の主力部隊は開拓団を見捨てて逃走し、開拓移民は置き去りにされた。武器を持たない黒川開拓団も現地住民の襲撃の恐怖と食料難に襲われる。そのような極限状況の中で、隣の熊本県来民村開拓団が現地住民の激しい襲撃に耐えきれず集団自決したことを知る。黒川開拓団も生か死かの選択を迫られ、「自決」の声が高まったが、最終的に生きて日本に帰国する道を選んだのだった。しかし、この「生きて帰国すること」の選択は次のような大きな犠牲を伴った。

現地住民の襲撃を避けるため、1945年9月、陶頼昭に駐留するソ連兵に警護を頼んだところ、うまく襲撃を逃れることができた。しかし、飲食と共に慰めのための女性をさし出すことを要求される。苦渋の選択であったが、15人ほどの開拓団の女性が集められ、副団長は既婚女性には頼めないで独身女性だけに頼むと語る。もちろん、彼女たちは抵抗の姿勢を示したが、開拓団が生きて祖国に帰るためだと説得され、泣く泣くこれに従った。

その後、ソ連兵が来ると彼女たちは開拓団本部の事務室の中に作られた接待所に呼ばれ、または陶頼昭駅に連れていかれ、性接待をさせられたのだった。「接待」という言葉の意味することも解らずお酒の相手をするだけなのかと思っていたのにソ連兵の性の相手をさせられた女性もいる。彼女たちは行為が終わるまで互いに手を握り合って耐え忍んだという。「泣いても叫んでも誰も助けはしてくれない。お母ちゃんお母ちゃんと声が聞こえる」。これはその「接待」役に選ばれた安江善子さんが残した言葉である。この接待所の近くには医務室が作られ、病気や妊娠を防ぐために性接待後の女性たちの体内を洗浄したという。こうした性接待は11月ごろまでの二か月近く続いたという。

そして、翌1946年春にソ連軍が撤退した後、8月に黒川開拓団は陶頼昭を出発した。この時は中国の国共内戦の最中であったが、彼らはその戦火を潜り抜け、9月23日、日本の地を踏んだ。

この後、黒川開拓団員には新たな戦いが待って

いた。帰国したものの故郷に居場所がある者は少なく、団員の多くは引揚者として新たな日本国内の開拓に従事せざるを得なかったのである。そして、性接待を強要された女性たちはその精神的な後遺症と「ソ連兵に犯された女」という中傷に長く苦しめられた。

時を経た1982年、黒川分村遺族会が満洲で性接待の犠牲になった上に現地で亡くなった女性たちのための乙女の碑を建立したが、性接待の事実は長く伏せられてきた。しかし、2013年11月9日、満蒙開拓平和祈念館開館に伴う語り部の会で、性接待を強要された安江善子さんがこの事実を証言した。そして、現在、郡上市高鷲町ひるがの在住の佐藤ハルエさんもこうした戦争の事実を語り伝えていくことこそが務めと考え、また、氏名を公表されていない別のお二人の方もこの過酷な体験について証言されている。これらの証言によって今まで封印されてきた事実が明らかになり、2018年にはこれまでの乙女の碑にこの事実を記した銘板を付設し、翌年に除幕式が行われ、黒川開拓団内の戦時性暴力を今に伝えている。

【2】性接待強要のメカニズム

「戦時性暴力」という言葉は、あらゆる戦争における性暴力を指す。残念ながら、様々な国民が加害者となり、様々な戦争の場面に於いて見られる現象である。日中戦争に限っても、例えば、石田米子と内田知行は、1940年末以来日本軍のトーチカ拠点がおかれた河東村を中心とした地域における日本軍による性暴力被害に関する多くの証言を記録している⁶。逆に、中国人からの強姦もあった⁷。日本の敗戦後の満洲や朝鮮半島に於いて、ソ連兵が逃げ惑う日本人女性を容赦なく蹂躪した例は枚挙に暇がない⁸。そして、これは難民収容所においても同様だった。例えば、『満洲泰阜分村 七〇年の歴史と記憶』には、「方正難民収容所の治安も日ごとに悪くなってきた。人さらい、略奪、強姦、が横行した。彼等の毒牙にかかった婦女子も相当な数に達した」とある⁹。こうした引揚げ女性の性的被害があまりに多いため、1946年3月、博多に二日市（現・筑紫野市）

保養所が開設されたことは周知の事実であろう。これは性的被害者の妊娠中絶のための秘密病院で、47年の閉鎖までに約500件の墮胎手術が行われたとされる¹⁰。

論者は、このような性暴力の実態があったことを踏まえたうえで、黒川開拓団が生き残るために団員の女性に性接待を強制した戦時性暴力には、①外部からの合流者の発言が意思決定に果たした役割、②性の犠牲者の決定方法、③性の犠牲を受け入れる際に果たした女塾の役割、以上3点が重要な働きを示していると考え、以下、検証していく。

①意思決定に果たした外来者の発言の役割

まず初めに、黒川村開拓団における性接待強要の決定過程を再検証する。これまでに明らかにされた証言を総合すると以下の経緯を辿っている。

ソ連軍が陶頼昭に入ってきた時、黒川村開拓団に女性を要求した。その時は関東軍が連れていた慰安婦が対応してくれたのだが、関東軍が武装解除すると彼女たちもいなくなった。そうしている内に現地住民による襲撃が激しくなり、それに耐えきれなくなった隣の来民村の開拓団が集団自決の道を選んだことが伝わる。追いつめられた黒川開拓団も一度は集団自決を考えたが、生きて帰国する道を選ぶ。

この選択を提案したのは佐藤ハルエさんの父親、安江長太郎であった。話し合いの席上、「自決」「自決」という開拓団員の声が高まる中で、安江長太郎は立ち上がり、「命を粗末にはならない。どんなことをしても生きて日本に帰国しよう」と強く訴えた。その声を受けて団員たちは生きて帰る道を選択し、その方法を模索することになったのだという。長太郎の娘・ハルエ（帰国後結婚され、現在は佐藤ハルエ）さんによれば、父親の長太郎は養蚕を仙台で学び、養蚕技術を教える教師を目指していたという。論者の聴き取り中も「父は立派な人でした」という言葉が何度もハルエさんの口から発せられ、ハルエさんの父親に対する深い敬愛の情が伝わってきた。長太郎自身は満洲で亡くなってしまい帰国が果たせなかったが、「生きること」を提唱し、結果として黒川

開拓団を帰国に導き多くの生命が救われたのは、この安江長太郎の言葉なくしてはありえなかったと思われる。この選択に導いた安江長太郎の功績は大きい。ただ、この「生きること」を選択したことにより、若い未婚女性たちは大きな苦難を背負うことになる。

生きるために黒川開拓団はソ連兵に援護を頼んだ。すると、ソ連兵の銃撃を目の当たりにした現地住民の襲撃が止んだ。その効果を認めた黒川開拓団は引き続きソ連兵に警護を頼もうとしたところ、再び女性の提供を求められた。しかし、前述したように、関東軍と共に行動していた慰安婦はもういなかった。ではどうしたらよいか。その時、黒川村開拓団の団長は徴兵され不在だった。残された副団長はじめ開拓団幹部が話し合った結果は、未婚の女性たちに身体を提供してもらうということだった。

ソ連軍への援護の依頼を提案したのは避難途中の外部からの合流者であった。この時、開拓団に滞在していた外来者で名前が明らかになっている者は二人いる。一人は「あらい」という医師で、性接待の後の避妊や洗浄の方法を指導した。もう一人はロシア語が堪能な「辻」という人物であった。ソ連軍との交渉をしたという事実からこの辻だと考えられる外来者は、性接待の必然性を親たちに次のように説いたという。「第一次世界大戦の時敗れたドイツに居た時の話である。敗戦に女はつきものだ。あの時連合軍に犯されて、ベルリン処女なしと言った。如何にしても皆さんは、娘をその犠牲から護る事は出来ないだろうと。」¹¹

窮地に追いやられ閉塞した開拓団の状況にこの外部からの合流者がもたらした情報「敗戦に女性の犠牲はつきもの」は、その意思決定に大きな影響力を持ったと考えられる。この言葉に背中を押されるように性接待が決定的になったと言ってよいだろう。

そして、この辻と思われる発言者の「ベルリン処女なし」という言葉は、第一次世界大戦後の連合軍兵士（モロッコ、チュニジア、アルジェリア、マダガスカル、セネガルなどの植民地兵を含む）によるドイツ人女性への強姦を指していると思われるが、この言葉は記憶違い、またはどの段

階かは定かではないが「第二次世界大戦後」の記載間違いであった可能性も全くないわけではない。というのも、第二次世界大戦においてベルリンが陥落し、ドイツが無条件降伏した1945年5月8日以降、ソ連占領地域ではソ連兵による強姦が多発しており、そのすさまじい被害の状態が多く研究者によって取り上げられているからだ。その一つに次のような報告がある。

ベルリンの二つの主要病院によるレイプ犠牲者の推定数は、9万5000 ないし13万人。ある医師の推定では、ベルリンでレイプされた10万の女性のうち、その結果死亡した人が1万前後、その多くは自殺だった。東プロイセン、ポンメルン、シュレージエンでの被害者140万人の死亡率は、ずっと高かったと考えられる。全体ではすくなくとも200万人のドイツ女性がレイプされたと推定され、くり返し被害を受けた人も、過半数とまでいかなくても、かなりの数にのぼるようだ¹²

いずれにしても、敗戦時、数えきれないほどの女性たちが性暴力の犠牲になる状況を象徴する言葉が開拓団の外来者の語った「ベルリン処女なし」だったのに違いない。そして、この言葉が開拓団内の女性の提供を正当化したのである。発言者は開拓団の外部からの、しかもこの発言者が辻であればより一層、ロシア語が堪能でソ連軍との意思疎通が可能な者の言葉ゆえに、開拓団内部の者には権威ある言葉として決定的な影響力を持ったと思われる。この発言者は避難の途中で開拓団に合流し、開拓団も同じ日本人のよしみでしばらくの逗留を許したと想像されるが、彼の来歴の詳細いことはわからない。佐藤ハルエさんによれば、もちろんこの辻という人物を知っていたが、辻はあくまでも外部の人間でありその後のことは全く分からないという。開拓団が日本に帰国する際、一緒に行動していたという記録や人々の記憶はない。考えてみれば命からがら逃避行を続ける者にとって、この言葉は自身が生きるためのものでもあったはずだ。この言葉の主が辻だとすれば、ソ連兵との交渉にあたった辻は開拓団民の命と共に自分の生命の保全をも少なからず考え合わせ、このように説得したものと考えられる。こう

した含意の有無を除いても、開拓団内が閉塞状況に置かれている故に、外来者の言葉に感化されたことが黒川開拓団の性接待強要を生み出す大きな要因となったことは確かである。

このような外来者のもたらす危機的状況は、敗戦後の混乱状況の中ではよく見られた現象であった。

敗戦後まもない朝鮮半島でスパイの疑いをかけられてシベリアに抑留され、その後も長く帰国することが叶わず留め置かれた蜂谷弥三郎という日本人がいる。彼を支えた現地のロシア人妻と彼の帰りを待ち続けた日本人妻、その二人が蜂谷と互いを思いやる姿は人間愛に富み感動的である。その経緯を記した蜂谷の書いた自伝や蜂谷と二人の妻を巡る物語が刊行されている¹³。彼がなぜこのような過酷な運命を辿ることになったかと言えば、敗戦の混乱の中で安岡という正体不明の流れ者に親切にしたことがあり、その男の密告からシベリアに抑留されたのである。安岡は己の身の保全のために真実とは異なる情報をまるで真実であるかのようにソ連軍に提供したと思われる。その結果、蜂谷はスパイと見做され、彼の人生は大きく変わってしまった。同じ日本人の運命を狂わせた日本人がいたことは事実なのである。望月百合子は敗戦前後の新京の様子を書き留めた「望郷の都・新京」¹⁴の中で、白日の下、繰り返される夫や子供、公衆の面前でのソ連軍による女性たちへの集団暴行を告発しているが、同時に外国軍に密告をし、同胞を売る日本人男性の姿も書き留めている。黒川村開拓団の外来者の言葉は、この密告と通底しているものがあると思われる。

そして、この外来者の発言は本当に正しかったのだろうか。ソ連兵の性的な暴虐の数々があったことや現地住民の襲撃のすさまじさは前述した通りであったが、奪うものがもう何も残っていないとわかった時、現地住民の襲撃は止んだ、という他の開拓団の証言もある。郊外に位置する開拓団の人々が終戦後、既に開設されていた都市部の日本人避難所に避難する道もあった。成田龍一は日本人の敗戦に伴う移動について、「居住者」(日本人会などの組織を作り、避難民を救援した)「疎開者」(ソ連侵攻時にいち早く情報を得て移動を開始

した者)「避難民」「逃避行」(開拓団から都市部に辿り着こうと移動をする人々)という新たなヒエラルキーが形成されたことを指摘している¹⁵。黒川開拓団はこの逃避行をもっと早く決行することができなかったのか、という疑問も残る。

しかし、この判断は非常に難しかったと思われる。というのも、逃避行の途中でソ連軍兵士や現地住民に襲われ、また、難民収容所に着いてもソ連軍兵士の略奪や女性が強姦されることは日常茶飯事であったことが数多くの引揚体験談に残っているからである。現に、黒川開拓団は46年春のソ連軍撤退後8月に徒歩による避難を始めたが、松花江に辿り着くと、そこに掛かっていた鉄橋は既に落とされており、中国人に船を出す代わりに女性を要求され、ここでも佐藤ハルエさんをはじめとする団の若い女性たちが「もうソ連兵に犠牲になってるから、ここを渡るためにあんたら頼むよ」と言われて犠牲になったのである¹⁶。しかし、「ソ連兵が何度も居留民会へやってきて、女を出せって要求するので、県長の孫重明にたいし、ここにいる日本婦人は農民ばかりだ。哈爾濱に行けば売春婦がたくさんいるから探してくる、金をくれと言ひ、六千円もらって木股君たち三人に行ってもらったのです」という証言もあり、開拓団内の女性を犠牲にするのではない方法を模索していた開拓団も現にあったことがわかる¹⁷。

このように、開拓団が生き残るために自らの団員女性に性接待を強要するという事態を避ける選択肢が全くなかったわけではないということ、そして、黒川開拓団が選択した団員の未婚女性に性接待を強要する決定の契機になったのが、閉塞状況の中にもたらされたロシア語を話す外来者の外部情報を伝える言葉であり、彼の示唆する方向へ開拓団の意思決定が流されてしまった可能性が高いということを指摘しておきたい。

②性の犠牲者の決定方法

ソ連兵は女性の提供を堂々と要求した。黒川開拓団においても、初めに女性の提供を求めたのはソ連兵であったとの複数の証言がある¹⁸。黒川開拓団とは別の長野県の大古洞開拓団では、

降伏勧告を受け入れた後、1000名余りで越

冬を決意しました。しかし、12月23日ソ連軍の使いが「軍用の慰安婦を2名出せ、出さなければ男性を皆殺しにする」と迫ってきた。とある。こうした要求に開拓団はどう対処したのか。大古洞開拓団の記録によれば、「団長は会議を開くものの結論が出ないまま困惑した」。すると、避難していた小古洞と漂河開拓団の婦人二人が、「私たちが行きましょう」と名乗り出て、団長が団員を前に「私はじめ団幹部が切腹すべきところだが、千余名の集団のため犠牲になってくれ」と血涙の言葉を述べ、全員が泣きさけぶ中、二人は去っていったとある¹⁹。この証言が示す通り、自ら名乗り出た女性がいたことも事実のようだ。

一方、前述の満洲泰阜村では「過去において経験のある慰安婦を収容所に集めて、彼らに操を提供し、一般の婦女子への魔の手を防いだ」。ここには性を職業とする女性がまず犠牲になるという構図がある。これは黒川開拓団の場合と同じである。ただ、続けて次のようにも述べている²⁰。

この犠牲になられた人達には、お礼を申し上げなければならぬと思う。この人達がいなかったならば、もっと多くの婦女子が毒牙にかかり、恥辱を受ける結果になったであろうことは、私がここで言うまでもない。

このように、女性たちを守るために、まず性を職業とする経験のある女性に頼む、ということが行われたようだ。

これは嫩江市街の収容所でも同じで、12月末にひどい食糧難に襲われた際、食料を渡す代わりに女性を出せとソ連兵に迫られ、日本人会では料亭で水商売をしていた女性をソ連の司令官に差し出した。そして、班ごとに兵士たちの相手をする女性を2人ずつ出すように要求され、2軒の料亭の女性たち24人に避難所の娘たちを救ってくれと頼みこんだという証言が残っている²¹。

では、このような性的職業の女性の存在がない場合はどうしたのか。こうした不幸な役割は誰でも回避したい。しかし、どうしてもということならば運を天に任せる方法しかないと考え、くじ引きでソ連兵の相手を決める、という場合もあった。『満洲集団自決』は次のような回想を取りあ

げている²²。

毎晩ソ連兵が来て香川団の女の人達は皆犠牲になっている。(中略) こうしなかったら汽車も出してもらえません。瑞穂の皆さん「うそもほうべん」という言葉があります。どうかこの難関を突破させてください。

そう頼まれて彼女が引いたくじは、一二番だった。彼女の前に一人もいたということになる。板敷の上で太ったソ連兵の相手をさせられた。病気のないように祈るしかなかった。何としても故郷に帰りたい一念だったと記す。

しかし、黒川開拓団では性的職業従事者への依頼や、くじ引きではなく、別の方法で犠牲者が決まったことに注目すべきである。

黒川開拓団の副団長が15名ほどの女性を集めて語ったのは「奥さんには頼んでなあ、あんたら独身だけ、どうか頼む」という言葉であった。この点について、古久保さくらの指摘²³を踏まえた猪股裕介の次のような指摘が既にある²⁴。すなわち、残された男たちは「出征兵士の銃後を守ること」が「お国のため」であると認識しており、残された男たちには「招集されて不在の仲間たち=男性への配慮」が存在しているのである。つまり、残った男性と既に従軍していて不在の男性とのホモソーシャルな絆が優先されていて、このような性の犠牲を銃後の妻たちに依頼することは戦場の男たちに申し訳ない、という心情があったことを指摘している。犠牲になる独身の女性たちは出征兵士の名誉を汚さないためにも兵士の妻よりも下位に置かれたのだ。こうした男性中心の論理だけではない。黒川開拓団で性接待を担った女性15人の中でリーダー的存在であり、泣きじゃくる年下の少女たちを慰め励まし、自らは妹を庇い妹の分まで接待に出た安江善子さんは両親があまり裕福ではなく、開拓団内の地位が低かったという。また、逆に副団長の娘も性接待に差し出されたが、その回数は他の人たちより少なかったとの証言もある。こうした開拓団内の人間関係も接待の強要に影響を及ぼしており、弱者にそのしわ寄せがいったと考えられる。

このように、性的犠牲者となった女性たちは開拓団の男性幹部たちから分節化され、性的職業従事者、独身者、開拓団内の階層または力関係によるランク付けによってこの理不尽な役回りを引き受けさせられたのである。

しかし、こうした性接待強要に働いた力学にはほかにも要因があると考えられる。次にその力学について指摘する。

③女塾の教え

当時、日本政府は開拓団員に精神的な平安をもたらす開拓を安定して発展させるために、また、混血を防ぎ、大和民族の純潔を保つために女性たちを「大陸の花嫁」として満洲に送った。こうした女性たちの養成所、それが女子拓殖訓練所であった。そして、満洲にも花嫁養成所を作りたいという関東軍の意向を受け、昭和14年、東安省密山県北五道崗山形村内に満洲初の開拓女塾ができた。そして、昭和18年度には13ヶ所に増設されている。吉林省舒蘭県小城郡上開拓団内に設置された郡上開拓塾もその一つであった。これは岐阜県送出の郡上村開拓団に新設された興亜凌霜女塾で、既に郡上村開拓団が独自に拓務訓練のために作っていた興亜凌霜塾の女子部を開拓総局が開拓女塾として認めたものであった²⁵。凌霜塾とは、幕末の郡上藩士、凌霜隊を顕彰したもので、辛苦に耐え、主君の恩に報いる凌霜魂を開拓の精神的な支柱として掲げていた。

女塾では通常、開拓の心構えや農業や裁縫、手芸や家事の方法などについて学んだが、猪股祐介は次のような女塾生の言葉を聴取している²⁶。

もう、だんだん、女塾にいるうちに、こう戦争が激しくなってきたから、「日本人の女性として、あくまで、最後を、あの、立派にがんばれ」ということを、いつも、それを言われましたね。どんなことが、もうこれ鼻先に、あの危険が迫っているこういう状態では。それだから、しっかり、日本女性に恥じないように、最後を務めよ」ということをやかましく言われました。

この「最後を務めよ」とは、日本民族の誇りを守るために自決をすることであると猪股は指摘す

る。北安省綏稜県瑞穂村が495人の集団自決をはかったのは昭和20年9月17日のことであった。土地を奪われた現地中国人の襲撃が続き耐えきれず、毒薬をあおったのである。追いつめられて行く開拓団の状況を綴った「難民被害状況概要書」²⁷には、「生きて虜囚の辱めを受けず」とうたった戦陣訓の精神が色濃く反映されていると思われる「生キテ彼等ノ玩具トナルヨリ、イツソ自決スルコト」の言葉が見られる。瑞穂村はこの言葉に従って死に至ったのである。凌霜塾で教えられた「日本女性に恥じないように、最後を務めよ」という言葉も同じ精神に依るものと考えられる。

しかし、同じ女塾に在籍した黒川開拓団の佐藤ハルエさんの捉え方は異なる。そこには微妙なニュアンスの違いが存在する。佐藤さんは当時の女塾の川原壮之進塾長が語った「この戦いに敗れる事はあっても、難関を切り抜ける精神をもつこと」という教えを強く記憶している。「郡上村の女塾において、川原塾長がどんな事が有るかもしれん。戦争が起きたら女は犠牲になることはきまったようなもんだから、あんたら、そのつもりでおれよ」とって、先生はお見通しでそういう教えをくださったんです。」という²⁸。この度行った佐藤ハルエさんへの聴取で、この点について論者が確認したところ、女塾で学んだことは開拓の心得や日本人としてどう生きるかといった精神論が中心だったということであった。といっても「日本女性に恥じない最後」換言すれば大和撫子として純潔を守ること、そして、「若しこの戦いに敗れる事が有っても異民族の中の日本女性としての覚悟」つまり、自決の覚悟を持つことを説かれた記憶はないと言う。「死ぬことを教えられたことはない」「あくまでも開拓団のためにどのように生きるかを教えられた」というのが佐藤ハルエさんの述懐であった。

黒川開拓団の女性たちは開拓団が生きて帰るか性の犠牲になるかという選択を迫られ性接待を泣く泣く選んだ。大和撫子として純潔を守る死とは真逆のことを行わざるをえなくなった彼女たちの混乱と苦悩の深さは想像に難くない。しかし、こうした純潔思想だけではなく、女性が性的な犠牲を強いられるであろう事を示唆し、それに耐える

覚悟をも醸成していたのが女塾だったということになる。このような教えが開拓団における性的犠牲と忍従の根底にあり、それは女塾というシステムによって構造・強化されていたのではないかと考えられる。

また、佐藤ハルエさんは父親が生きて帰ることを主張し開拓団の方向性が決まったため、その父の想いに応えようとしたとも語っている。彼女の父は娘に「死んでしまうよりは犠牲になっても日本に帰らなならんで、がんばるよりほか仕方ないな」と励ましたという。自らが性の犠牲となっても開拓団の皆の生命を優先するという考え方に導いた女塾の教えと共に、敬愛する父の言葉に従う姿勢が佐藤ハルエさんを支えていたと考えられるのである。佐藤さんは一部の単独行動によって先に開拓団を離れた人々²⁹や病気で亡くなった人々を除き、開拓団が無事に故郷に戻ることができたことを誇りに思っていると語った。もちろん、佐藤ハルエさん自身、性接待に出たことに対する中傷に傷つき、うつされた性病の治療もしなければならなかったが、全ての事情を承諾した上で自分と結婚した夫の佐藤健一さんに深く感謝し、今もなお続く黒川分村遺族会の絆を誇りにしている。この「黒川開拓団という集団」への強い献身、忠誠が何よりも勝っていたと思われる。

黒川開拓団で性接待を強要され、存命の方は現在、佐藤ハルエさんを含め3名のみである。しかし、後世にこの事実を伝えることに使命感を持ち、名前を公表して証言をされているのは佐藤ハルエさんだけである。やはり家族や知人に知られたくないという気持ちが強く名前を公表しない方、また、黒川村とは一切関わりを持ちたくないという姿勢を貫いている方もいる。こうした現実を考えると、性接待の強要も、性を提供せざるをえない状況に追いつめられた女性たちがいたことは事実なのだが、そこには様々な意思が存在しているのであり、一律に女性たちの想いをまとめることは難しいと言わざるをえない。しかし、女塾で教えた「大和撫子の持つべき貞操観念」は性接待を強要された女性たちを苦しめたであろうし、「開拓団のために尽くせ」と言う女塾の教えもまた、未婚女性たちに性接待を受け入れさせること

となった。戦時下の女性の精神を司った女塾の教えは黒川村開拓団の性接待強要を成立させた大きな要素となっており、看過できないものがある。

【終わりに】

以上、黒川開拓団内の性接待強要という戦時性暴力の力学について考察してきた。黒川開拓団は敗戦時の在籍人数662名中、死亡者208名、残留孤児3名、帰国を果たしたのは451名であった。瑞穂村や来民村のように全滅した開拓団もあることを考えると黒川村の帰国者実数はかなり多い。しかし、その背景には黒川村開拓団内の未婚女性たちがソ連兵や中国人への性接待を強要されるという事実があったのである。本論は、この性接待の強要について①意思決定に果たした外部からの合流者の発言、②性の犠牲者の決定方法、③女塾の教え、以上3つの観点から考察した結果、閉塞状況の中で外来者の言葉が大きな影響力を持ち、犠牲者の女性は男性団員と不在の男性団員との精神的ホモソーシャルな関係の下に置かれ、既婚か未婚かに分断、階層化されたこと。そして、更に女性の中の弱者にしわ寄せがいく構造が作られていたことが明らかになった。同時に、開拓団に所属している以上、開拓団員の生命を尊重し開拓団の決定に従わざるをえないという、つまり「個」よりも「共同体」を重んじる日本人の精神構造が大きな役割を果たしていたことも浮かび上がった。これらの点は現代の日本社会にも通じるところが大いにある。黒川開拓団の性接待強要のメカニズムについて研究することは過去の歴史研究ではなく、我々の生きる社会を考察することにつながっている。

【注】

- 1 現在の岐阜県加茂郡白川町黒川地域。
- 2 安江喜子さんが2013年11月9日、満蒙開拓平和記念館の語り部の会でこの事実を明らかにした。また、佐藤ハルエさんもこの事実を

- 公表している。
- 3 2013年、黒川村分村遺族会が黒川の佐久良太神社境内に既に建立されていた「乙女の碑」に2020年「碑文」を敷設し、後世にこの事実を知らせている。
 - 4 平井美帆が黒川開拓団の取材の成果をまとめ、ルポ「忘れない あの凌辱の日々 忘れさせない乙女たちの哀咽」を『女性自身』(光文社、2016年10月4日号)に寄稿(2022年1月、『ソ連兵へ差し出された娘たち』として集英社より刊行)。その後、2017年8月5日、NHKが60分間のドキュメンタリー番組ETV特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」を放映(2020年3月、川恵美・NHK ETV特集取材班が『告白 岐阜・黒川満蒙開拓団73年の記録』として、かもがわ出版より刊行)。ANNは2019年3月1日、「満蒙開拓団“戦争と性暴力”の史実を刻む」、2020年3月「史実を刻む～語り継ぐ“戦争と性暴力”」を放映した。また、『岐阜新聞』が「封印された記憶——岐阜・満州開拓団の悲劇——」として2018年4月24日から11月19日まで連載。
 - 5 本論末尾、参考文献参照。
 - 6 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』(創土社、2004年)
 - 7 例えば、合田一道『開拓団壊滅す「北満農民救済記録から」』(北海道新聞社、1991年)には、ソ連軍の突然の侵襲により逃走の途中、素っ裸にされ複数の満人たちに襲われたこと、やっとたどり着いた難民収容所ではソ連兵が手当たり次第に女性に暴行を繰り返していたという回想手記が紹介されている。(pp.169～174)
 - 8 下川正春は『忘却の引揚史 泉靖一と二日市保養所』の中で、山口放送『奥底の悲しみ——戦後七〇年、引揚げ者の記憶』(2015年)(日本放送文化大賞グランプリ受賞)の、ロシア兵による相次ぐ強姦の情景の証言を紹介している。目の前で女たちが強姦され抵抗すれば撃ち殺される場面、妻が連れていかれるのを泣きながら見つめるしかない夫の姿、ソ連兵に抵抗する妻に「負けただから、命まで取られんから」と言うことしかできない男の姿などが記されている。
 - 9 『満洲泰阜分村——七〇年の歴史と記録』(不二出版、2008年)所収、熊谷秋穂「大陸流転」p.502
 - 10 新海均『満州集団自決』(河出書房新社、2016年) pp.207～208
 - 11 黒川村開拓団員・曾我久夫さんの『手記 中華人民共和国 東三省乃三年間』9月23日の記録(川恵美『告白』p.68より)
 - 12 Antony Beevor, *Berlin The Downfall 1945*, 2002 : 邦訳 アントニー・ビーヴァー『ベルリン陥落 1945』川上洗訳、白水社、2004、邦訳の p.602。なお敗戦直前・直後の具体的な状況については pp.465～468、p.482、pp.601～614 に詳しい。
 - 13 蜂谷弥三郎『望郷 二つの国 二つの愛に生きて』(致知出版、2012年)、村尾靖子『クラウディア 奇跡の愛』(海拓舎、2003年)、村尾靖子(文)小林豊(絵)『クラウディアのいのり』(ポプラ社、2008年)、村尾靖子『クラウディアの祈り』(ポプラ社、2009年)、坂本龍彦 編著『シベリア虜囚半世紀 民間人蜂谷弥三郎の記録』(恒文社、1998年)など。
 - 14 『大東亜戦史6 満州編(上)』(富士書苑、昭和44年)所収。pp.278～279には「同胞を売る男たち」と題し、逃げた関東軍の代わりに軍隊に所属したことのある男たちを駆り集めてシベリアに送ろうとするソ連兵からの圧力で、仲間を密告する日本人の男たちの話がある。
 - 15 成田龍一『増補「戦争経験」の戦後史 語られた体験／証言／記憶』(岩波現代文庫、2020年)
 - 16 黒川開拓団は1946年8月下旬、鉄路で長春を目指し、陶頼昭を出発した。陶頼昭と徳恵駅の間鉄橋が既に破壊されており、現地の中国人が船を出す代わりに女性を要求したため、団幹部が未婚女性に性接待を強要した。この事実は語られてこなかったが、2017年

の陶頼昭訪問の際、この「松花江渡河における痛ましい事件」の説明があった。そして、『岐阜新聞』の「封印された記憶——岐阜・満州開拓団の悲劇——」の(6)「引き上げ時、『船渡す代わり』中国兵が要求」の中でも匿名の証言が掲載されている。

- 17 『開拓団壊滅す「北満農民救済記録から」』(注7と同じ) p.228
- 18 注11の曾我久夫さんの手記のほか、黒川村開拓団の一員であった藤井恒さんの回想(川恵美『告白』p.226)
- 19 『開拓団壊滅す「北満農民救済記録から」』(注7と同じ) p.90
- 20 『満洲泰阜分村——七〇年の歴史と記録』(不二出版、2008年)所収「大陸流転」熊谷秋穂、p.502
- 21 杉山春『満州女塾』(新潮社、1996年) p.213
- 22 『満洲集団自決』(注10と同じ) pp.200～201
- 23 古久保さくら「満洲における日本人女性の経験——犠牲者性の構築——」(『女性史学』第9号、1999年7月) pp.1～14
- 24 猪股裕介「ホモソーシャルな戦争の記憶を超えて——満洲移民女性に対する戦時性暴力を事例として——」(『軍事史学』51巻2号、2015年9月、p.103)
- 25 注21のp.54
- 26 注24のp.101
- 27 引用は『開拓団壊滅す「北満農民救済記録から」』(注7と同じ) pp.140～141
- 28 川恵美・NHK ETV特集取材班『告白 岐阜・黒川 満蒙開拓団73年の記録』(かもがわ出版、2020年)
- 29 安江善子さんは、敗戦翌年の4月に両親ともにチフスで亡くなるが、母親が亡くなる前に早く開拓団を出るようという言葉を残したことがきっかけとなり、幼い弟と妹を連れて開拓団を離れ、大変な苦勞をしながらも開拓団より約一か月早く帰国した。

【参考文献】

- ・平井美帆「忘れたいあの陵辱の日々忘れさせない乙女たちの哀咽」(『女性自身』59巻35号、2016年10月4日) pp.62～68
- ・川恵美・NHK ETV特集取材班『告白 岐阜・黒川 満蒙開拓団73年の記録』(かもがわ出版、2020年)
- ・「封印された記憶——岐阜・満州開拓団の悲劇——」『岐阜新聞』2018年4月24日から11月19日まで連載。
- ・二松啓紀『移民たちの「満州」 満蒙開拓団の虚と実』(平凡社、2015年)
- ・加藤聖文『満蒙開拓団 虚妄の「日満一体」』(岩波書店、2017年)
- ・合田一道『開拓団壊滅す「北満農民救済記録から」』(北海道新聞社、1991年)
- ・下川正春『忘却の引揚史 泉靖一と二日市保養所』(弦書房、2017年)
- ・新海均『満洲集団自決』(河出書房新社、2016年)
- ・杉山春『満州女塾』(1996年、新潮社)
- ・相庭和彦・大森直樹・陳錦・中島樹幹・宮田幸恵・渡辺陽子『満洲「大陸の花嫁」はどうつくられたか』(明石書店、1996年)
- ・下川松治『忘却の引揚げ史 泉靖一と二日市保養所』(弦書房、2017年)
- ・『満洲泰阜分村——七〇年の歴史と記録』(不二出版、2008年)
- ・蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年)
- ・『大東亜戦史6 満州編上』(富士書苑、昭和44年)
- ・『大東亜戦史7 満州編下』(富士書苑、昭和44年)
- ・成田龍一『増補「戦争経験」の戦後史 語られた体験／証言／記憶』(岩波現代文庫、2020年)
- ・「特集シンポジウム『戦争と性暴力の比較史へ向けて』を読む」(『立命館言語文化研究』30巻3号、2019年2月)
- ・上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』(岩波書店、2018年)

- ・石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』(創土社、2004年)
- ・古久保さくら「満洲における日本人女性の経験—犠牲者性の構築—」(『女性史学』第9号、1999年7月)
- ・猪股祐介「満洲体験を語り直す——岐阜県黒川村分村遺族会を事例として——」(蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008年)
- ・猪股裕介「ホモソーシャルな戦争の記憶を超えて満洲移民女性に対する戦時性暴力を事例として——」(『軍事史学』51巻2号、2015年9月)
- ・猪股祐介「満洲移民の引揚体験——岐阜県黒川開拓団を事例に」(『アジア遊学』145号、2011年9月)
- ・山本めゆ「戦時性暴力の再-政治化に向けて——『引揚女性』の性暴力被害を手掛かりに——」(『女性学』22号、2015年3月)
- ・山本めゆ「『引揚』と性暴力被害」(『ジェンダー史学』15号、2019年10月)
- ・山本めゆ「『二日市保養所』との出会いと再会」(『福岡女たちの戦後』1、2016年)
- ・山本めゆ「引揚げの記録/記憶に於ける性暴力の主題化——「水子のうた」を学び超えるために——」(『福岡女たちの戦後』2、2017年)
- ・山本めゆ「生存者の帰還——引揚援護事業とジェンダー化された<境界>——」(『ジェンダー研究』17号、2015年2月)
- ・アントニー・ビーヴァー『ベルリン陥落 1945』(川上洸訳、白水社、2004年)
- ・ヘルケ・ザンダー、バーバラ・ヨール編著『1945年 ベルリン解放の真実——戦争・強姦・子ども——』(現代書館、1996年)
- ・蜂谷弥三郎『望郷 二つの国 二つの愛に生きて』(致知出版、2012年)
- ・村尾靖子『クラウディア 奇跡の愛』(海拓舎、2003年)
- ・村尾靖子(文) 小林豊(絵)『クラウディアのいのり』(ポプラ社、2008年)、村尾靖子『クラウディアの祈り』(ポプラ社、2009年)
- ・坂本龍彦 編著『シベリア虜囚半世紀 民間人 蜂谷弥三郎の記録』(恒文社、1998年)

